エジプト第1王朝の王墓地比定に関する一試論

——輸入土器からの視点——

Reconsideration of the Location of the Egyptian
First Dynasty Royal Tombs

——from the Viewpoint of Palestinian Pottery——

中野智章^{*}
NAKANO Tomoaki

ABSTRACT Although most scholars now believe that the royal tombs of the Egyptian first dynasty were located in Abydos rather than in Saqqara, the discussion of the location has been based mainly on the comparison of tomb size rather than tomb artifacts. In this paper, the location will be reconsidered based on the use of Palestinian pottery found within the tomb artifacts.

This time a corpus has been collated of Palestinian pottery of the Egyptian first dynasty, including the unpublished data of the Ashmolean Museum in Oxford and the Petrie Museum in London. From an analysis of this corpus, some interesting features are observed.

The observations of the pottery ware distribution in Egypt indicate that there is a clear difference in the usage of imported ware dependent on type. The LFP (Light Faced Painted) ware seems to have been much more highly prized and it has been suggested, was used to contain the famous scented oil of Palestine which was placed near the body of king. The RP (Red Polished) ware however, was important more as a container of foreign goods such as wine, oil, etc. though still restricted to a small number of people. Accordingly, it is concluded that the Abydos tombs with the many LFP ware artifacts were of royal use, while Saqqara would be for high officials and is consistent with the conclusion from the studies of tomb size.

* 南山大学大学院博士課程
Ph. D. Student, Nanzan University

は じ め に—王墓地論争の経緯

文字が初期の段階にあり、資料に乏しいエジプトの第1王朝を理解するには、墓などの遺構や、そこからの出土品を中心に研究を進めることが不可欠となる。その際、その遺構に誰が関係していたのかは、それぞれの資料の価値を判断する上で非常に重要な問題であると言えよう。

その点、第1王朝の王墓地については現段階で有力な説が2つ存在する。一つは上エジプトのアビドス (Abydos) にあるとする説、そしてもう一つは、下エジプトのサッカラ (Saqqara) に真の墓があり、アビドスには空の墓が存在したとする説である [Kemp 1989, Grimal 1992]⁽²⁾。これは以下のような経緯に依っている。

まずは上エジプトのアビドスにおいて、今世紀初頭のアメリカンによる乱雑な発掘の後 [Amélineau 1899-1905]、ピートリが第1王朝の墓8基、第2王朝の墓2基を調査し [Petrie 1900, 1901, 1902, 1903]、それがマネトの言う「第1王朝の王達はティス (This) の出身である」との伝承に合致したこと⁽³⁾、そして王名を記した墓碑の類から、そこが同王朝の王墓地であるとの考え方が広く支持されるに至った。ところが1935-56年にかけてエメリーが、第1王朝時の首都であったとされるメンフィス (Memphis) の、近郊に位置する下エジプトのサッカラで扶壁を持った大規模なマスタバ群を12基発掘し [Emery 1938, 1939, 1949, 1954, 1958]、アビドスを凌ぐ墓の規模や装飾、王名を有する封泥類の発見からその内の7基を王墓としたことで [Emery 1961]、結局王墓地が2つ拮据する結果となった。エメリーは、サッカラが真の墓で、アビドスのそれは空墓であると主張したのである [Emery 1961]。彼の説はその後ロエールに引き継がれ [Lauer 1979, 1984-1985]、現在でもフランスなどのエジプト学者には、アビドス空墓・サッカラ王墓説を支持する者が多い [Grimal 1992, Vercoutter 1992]⁽⁴⁾。

ところが元のアビドス王墓説も、ケンプの新説で再び脚光を浴びることとなった [Kemp 1966, 1967]。アビドスには、墓群から1キロ程北東に離れた地点に同時期に建てられた周壁状の建造物が存在するが [Aytrion 1904, Petrie 1925]⁽⁵⁾、彼はそれが墓と一体になることで、王の葬祭複合体を形成していたのではないかと唱えたのである。この説はカイザーなど多くの研究者の支持を得て [Kaiser 1981]、現在ではアビドス・サッカラの両地が王墓地だったので

はなく、アビドスに真の王墓が存在し、サッカラの墓は出土した石碑や称号等⁽⁶⁾から判断して、高官の墓ではなかったかとする説が広く受け入れられつつある[Spencer 1993: 93]。これは先述の両墓説同様、遺構の規模に注目したものであり、その葬祭複合体のサイズが、サッカラの墓のサイズをはるかに上回るとの観点から導かれたものである。そして、その複合体がサッカラにあるジョセル王の階段ピラミッド（第3王朝）の前段階をなしていた可能性が強いこと[Kemp 1989: 53-61]、また、近年ドイツ隊によりアビドスで先王朝末期の首長墓群が発見され、同地における先王朝から初期王朝への墓群の継続性が確認された点も[Dreyer 1990, 1993]、この説の優位性を確保する一因となっている。

しかしながら、アビドスにおける葬祭複合体の規模がサッカラの墓の規模に勝るからといって、決してサッカラが王墓地でないと言い切ることはできないであろう。そこで本稿では、従来遺構規模の比較に依存してきた王墓地の比定を、候補に挙がった墓から出土した遺物を使用して新たに考え直してみることにする。

I. 研究対象の設定

本稿で取り扱う遺物は、アビドス・サッカラ両地の墓より出土した、通称「アビドス土器」と呼ばれる初期青銅器時代パレスティナ⁽⁸⁾の土器である。これは、本来ならば両墓群より出土したすべての遺物を比較・検討してみるのが一番良い方法であるが、ともに盗掘や火災等の被害を受けており、すべての遺物⁽⁹⁾が残存していたわけではない。そこでまず両地から発見されている個々の遺物⁽¹⁰⁾を、研究材料として扱いうるものかどうか一通り検討した。その結果、貴石等の稀少品は多くが盗掘に遭っており、また、日常の土器類も既に大量生産されてエジプト全土に及んでいたとされることから、共に王墓地を比定する際の研究材料としては不適切であると判断した。そこで輸入土器に着目した訳だが、主な選択の理由は次の3つである。

まず第1の理由は、土器であるが故に盗掘の被害を余り受けておらず、残存率も比較的良好であると考えられるためである。無論完形品は少ないものの、破損したとしてもその断片が残っている可能性は高い。第2の理由は、このアビドス土器が当時エジプトと密接な関係にあったパレスティナ地域から輸入さ

れ、エジプトのエリート層を葬ったであろう「大墓」〔小野山1975: 29〕に集中して副葬されているためである。⁽¹⁾かつて1950-60年代にかけて、ヤディンやエイビンは第1王朝開始時におけるエジプトのパレスティナ征服の可能性を論じたが〔Yadin 1955, Yeivin 1960〕, その後, 30年ほどの間にパレスティナを中心とする地域での発掘調査は飛躍的に進行している。それによると, (図1)に見られるように, 例えばエジプトとの交易における中継点であったとされるアン・ベソール (En Besor) ではエジプトの王名を記した遺物やエジプト式の建築遺構, 土器が出土し〔Gophna 1992〕, 同様にテル・エラニー (Tel Erany) でも多数のエジプト式製品が出土するなど, その他多くの遺跡でエジプトとの関係が確認されており〔Levy, van den Brink, Goren and Alon 1995〕, 最近では, エジプト人が管理していた一種のコロニーのような地域がパレスティナの内部に存在したと述べる研究者も出てきている〔Porat 1992〕。無論コロニーの実態については議論が多いものの, 少なくとも出土している遺物の量や性格から見て, エジプトの王に関連したなんらかの勢力がその地に居住していたことだけは疑いがない。そこで, その地からエジプトへ輸入された土器がどう分布していたのかを探れば, 王墓所在地を知る上でなんらかの手掛かりを得ることができるのではないかと考えた次第である。また, 近年では先述したアビドス先王朝期の首長墓群からも大量のパレスティナ土器が発見されており〔Dreyer 1993〕⁽¹²⁾, この点からも, 輸入土器を対象として選択することを決断した。

そして, 第3の理由として従来アビドス土器はごく簡単にしか紹介されていなかったが, 今回そのデータを大幅に改善することができた。サッカラを調査したエメリーは輸入土器をG類と名付け, 点数等についても比較的詳しく述べているが〔Emery 1958: Pl. 31, 75〕, 一方のアビドスに於けるピートリの報告では輸入土器はごく簡単にスケッチ程度でしか紹介されておらず, 何が何点出土したのか, その特徴はどういったものだったのか, といった細かな記述は殆どなされていない〔Petrie 1901: Pl. LIV, 1902: Pl. VIII〕(図2)。そのため「アビドス土器の分布を通して第1王朝期の王墓地を探る」研究は, 実現の余地がなかった。従来のアビドス土器に関する研究は, エジプトとパレスティナ間の相対的な年代観を探ろうとするもの〔Kantor 1965, 1992, Hennessy 1967, Stager 1992〕や実際の運搬物を考察するもの〔Helck 1962, Stager

(図1) エジプト製品を有するパレスティナの遺跡分布図
(初期青銅器時代Ⅰ期)

[Brandl, B. 1992. Evidence for Egyptian Colonization in the Southern Coastal Plain and Lowlands of Canaan during the EBI Period, in *The Nile Delta in Transition: 4th-3rd Millennium B. C.* (ed. by E. C. M. van den Brink), Tel Aviv.] を改変。

(図2) アビドス報告書における輸入土器の図版
 [Petrie, F. 1901. *The Royal Tombs of the Earliest Dynasties II*. London. Pl. LIV]

1985, Ben-Tor 1986, Ward 1991], そして胎土分析を行うものが主であった [Hennessy 1963, 1967, Porat 1989]⁽¹³⁾。

そこで、筆者はデータが不十分であったアビドス出土分の土器について所在を調査し、未公開の資料が英国のロンドン大学とオックスフォード大学に保管されていることを確認した。また幸い両大学からは調査の許可を頂けたので⁽¹⁴⁾、ここにその結果得られたアビドス土器の新データを基に、私なりの第1王朝における王墓地論を提示する。ただし紙数の制限上、細かな土器のデータは割愛した。詳しくは [中野 in press] を参照されたい。

II. アビドス土器の概略

アビドス土器は2種類に大別され [Amiran 1969, Kantor 1992, Stager 1992], 当時のパレスティナにおける最高の技術で製作されている [Ben-Tor 1992: 107]。まず最初は赤色磨研土器と言われる器種で、器高は 20-50 cm 程である。焼成は良好なものから粗悪なものまで差があるが、表面に赤色のウォッシュを施し、上から小石などで全体に磨きをかけた赤褐色主体の土器である。形態は細頸の把手付水注で、高スタンプの底部を有するものが多い。把手は1つのみでなく複数付くものもある。液体がしみ出さないよう工夫がなされていることから、油やワイン等の運搬に使用されたと考えられている。出土範囲はトルコ領のテル・エル・ジュダイダ (Tel el-Judeideh) から、レバノンのビブロス (Byblos) を経て、死海周辺の地域にまで及んでいる (図3)。

もう一方は彩文土器で、器高は赤色磨研土器よりやや低く 10-40 cm 程である。焼成は良好で素地に白黄色のスリップをかけ、その上から赤色の顔料を用いて幾何学紋様を胴から上部に描く。器型は片把手付小型平底の水注が中心で、オリーブ油等の油を入れたとされる。パレスティナでは、アラド (Arad) の調査以前には知られていなかったが、同地から最も多く出土し、他にはベト・イエラ (Beth Yerah), ベト・ジャン (Beth Shean), エリコ (Jericho) 等から出土している (図3)。

時期的には、前者が既に先王朝時代末期にデルタ地帯のミンシャット・アブ・オマール (Minshat Abu Omar) などで現れるものの、後者は第1王朝のジェル (Djer) 王期に初めて登場する。地理的には、赤色磨研土器がサッカラ・タルカン (Tarkhan)・ラフーン (Lahun)・アビドス、彩文土器がアブシ

(図3) アビドス土器分布図

[Ben-Tor, A. 1992. *The Archaeology of Ancient Israel*.
New Haven and London. P. 107, Map 4.2] を一部改変。

ール (Abusir el Mereg)・サッカラ・アビドスから出土している (図3)。

III. 分 析

エジプトにおける分布状況を基に、赤色磨研土器と彩文土器の性格について分析する。

(1)出土点数

まず最初に示すのは、エジプト各地におけるアビドス土器の出土点数を比較したものである (表1)⁽¹⁵⁾。従来公刊されていたデータでは、赤色磨研・彩文土器を合わせた数値がサッカラの128点に対しアビドスはわずか42点と、圧倒的にサッカラの量が多かったが、今回の調査で、実はアビドスから従来の数値を大きく上回る190点もの点数が出土していたことが判明した。

実際には、アビドスの盗掘や破壊はかなりひどかったため、本来の土器点数はこれをも上回ると予想される。そこでこの状況は、他のタルカンやラフーン、あるいはアブシールといった遺跡と比較して、アビドス土器の出土点数が、いま王墓地問題を考える上で最も重要な、アビドス・サッカラの2墓地域に集中することを示している。また土器を種類別に見てみると、アビドスとサッカラにおいて赤色磨研土器の数量はアビドス112点・サッカラ125点と余り差はないものの、彩文土器に関しては、アビドスが78点に対しサッカラは3点と、圧倒的にアビドスの出土点数が多い。しかも、サッカラの彩文土器3点に関しては後述するように模造品の疑いが残っているので、その点からも、この土器はほぼアビドスに集中して出土すると考えて差し支えないと推測される [Macramallah 1940: 12]。

表1 エジプト各地におけるアビドス土器の出土点数

	アビドス	サッカラ	タルカン	ラフーン	アブシール
赤色磨研土器	112(17)	125	2	3	0
彩文土器	78(25)	3?	0	0	1

注：()内は、従来知られていた数値。

(2)時期別の出土点数

次に、第1王朝のどの王期からアビドス土器が出土するかを見る (表2)⁽¹⁷⁾。
まず両種の土器を合わせた点数が最も多いのはドゥエン (Dewen) 王の時期

表2 アビドス・サッカラにおける墓毎のアビドス土器出土点数

墓毎の 出土点数 王期							
ア	ハ	アビドスB 赤1彩0					
ジ	エ	ル	アビドス0 赤32彩1				
メ	ル	ネ	イト	アビドスY 赤1彩0			
王		妃					
ジ	エ	ト	アビドスZ 赤0彩1	サッカラ 3504 赤24彩0			
ド	ウ	エ	ン	アビドスT 赤14彩9	サッカラ 3506 赤57彩0	サッカラ 3036 赤5彩0	サッカラ 3035 赤2彩0
						サッカラ 3507 赤20彩0	サッカラ 下級貴族墓地 赤11? 彩2?
セ	メ	ル	ケ	ト	アビドスU 赤24彩37		
カ		ア		アビドスQ 赤5彩0	サッカラ 3505 赤14彩0	サッカラ 3500 赤3彩0	サッカラ 3120 赤0彩1?
時	期	不	明	アビドス 赤35彩30			

注：赤＝赤色磨研土器，彩＝彩文土器

(18)
 (赤色磨研土器109点・彩文土器11点)で、これは彼の治世が約50年と長かったこと [Grimal 1992: 53] に関連している可能性があろう。そして続く第5代目の王、アネジブ (Anedjib) 王期には輸入土器の出土が全く確認されていない。彼の治世は短命で [Helck 1987: 122-126; Grimal 1992: 53] 国内も不安定だったとの伝承があり、アビドスにおける彼の墓とされる遺構 (アビドスX号墓) も造りが粗雑なことから、一つの推定ではあるが、この時期土器輸入はストップしたか、あるいは飛び抜けて輸入土器の出土量が多い次のセメルケト王の墓とされる遺構 (アビドスU号墓) に土器等副葬品の移動が行われたのかかもしれない。⁽¹⁹⁾

また全体の傾向として、赤色磨研土器はほぼ同王朝の全時期にわたってアビドス・サッカラの双方から出土が見られるものの、彩文土器は前半よりもむしろ後半、ドゥエン王期以降に出土量が多いことがわかる。ちなみにカンターは、エジプト・パレスティナ間の相対年代設定を行うに当たり、彩文土器が最初に出土するジェル王期をパレスティナ初期青銅器時代Ⅱ期の開始と位置づけている [Kantor 1992]⁽²⁰⁾。

また赤色磨研土器に関しては、サッカラにおいて必ずしもその時期最大の墓から最大の点数が出土しているとは限らない。例えば、ドゥエン王期は今述べたように最もアビドス土器の出土が多い時期であるが、57点もの赤色磨研土器を有していた3506号墓よりも大型の3035号・3036号墓からは、赤色磨研土器が各2点・5点とごくわずかしき出土していない。

このように新データから分布の状況を考察してみると、赤色磨研土器と彩文土器では出土する量や時期に大きな差があることが明らかとなる。そこで、この2種類の土器にはその扱われ方に何らかの差が存在したとの仮定に基づき、次の点を見てみよう。

(3) 出土状況

両土器の具体的な出土状況を記録のある分について調べたところ、表3のようになった。すると彩文土器は玄室以外の出土例が皆無であるのに対し、赤色磨研土器では玄室以外に副葬品室等から出土する例（サッカラ3504, 3035, 3505, 3506号墓、ヘマカ墓）や、⁽²¹⁾ 殉葬ではないかとされる従者達の墓から出土する例（アビドスO、サッカラ3506, 3500号墓）が見られることが判明した。

元来アビドスとサッカラでは墓の構造が大きく異なっており、アビドスにおける玄室の占める割合はサッカラに比べてはるかに大きいものの、⁽²²⁾ それでも彩文土器がアビドスの付属墓から1点も出土しない事実は、やはりこの両種の土器の副葬法に何らかの相違があった可能性を指し示すものと言える。

そこで、更に両土器の製法や製作地の面からこの点を考える。

(4) 土器の製法

アビドス出土の各種土器片を実見したところ、彩文土器の製法はほぼ同一であったが、赤色磨研土器においては同じ墓から出土した土器片の間でも様々な製法が確認された。同土器においてはサイズや形状、色調を初めとして、胎土の密度や焼成の度合い、またはウォッシュや磨きの掛け方といった器面の調整

表3 各地点における出土状況一判明分。

アビドス

- O号墓（ジュエ王期）：赤色磨研土器
数点（炭化した布と共に。玄室上部小部屋）
3点（付属墓O30）
- T号墓（ドゥエン王期）：赤色磨研土器
点数不明（階段部）

サッカラ

- 3504号墓（ジュエ王期）：赤色磨研土器
3点（玄室），20点（上部・下部両構造の小部屋），
1点（付属墓31号墓）
- 3035号墓（ドゥエン王期）：赤色磨研土器
2点（小部屋W）
- 3036号墓（ドゥエン王期）：赤色磨研土器
5点（玄室）
- 3506号墓（ドゥエン王期）：赤色磨研土器
54点（玄室），1点（階段），1点（付属墓3号墓）
- 3507号墓（ドゥエン王期）：赤色磨研土器
20点（玄室）
- 3120号墓（カア王期）：彩文土器？
1点（玄室）
- 3500号墓（カア王期）：赤色磨研土器
1点（付属墓1号墓），1点（付属墓2号墓）
- 3505号墓（カア王期）：赤色磨研土器
4点（入口階段部），7点（玄室），2点（玄室上の堆積），1点（祠堂）

タルカン

- 1060号墓（おそらくジュエ王期）：赤色磨研土器
1点（玄室）

注：ラフーンの墓は単室墓。アブシールの出土状況は不明。アビドスの墓については上部構造が残存しないものの，輸入土器に重大な関心を持っていたピートリは，玄室以外で見つかった分について出土状況を記している。

においても，多様な手法が観察される。⁽²³⁾ またそのような製法の差は，第1王朝全般に渡って継続的に見られることが判明した [中野 in press]。

(5)製作地

次に，多様な製法を有する赤色磨研土器がどの地点で製作されたのかを調査した。すると，前述した各種土器の分布域の中でも，エジプト出土の土器に類似する器種は，ほぼ死海の周辺を中心に広がっていることが判明した。(図3)

では、赤色磨研土器が現代のトルコ領であるテル・ジュダイダにまで分布しているように見えるが、土器の形態は、頸が全般的にエジプト出土のものより長いなどかなりの相違が見られるため、安易に結びつけるべきではない。カンターは、アビドスから出土したものがメギド (Megiddo) やエリコ (Jericho)、ゲゼル (Gezer)、アイ (Ai)、といった死海周辺の土器に類似することを指摘したが [Kantor 1942: 192-196]、これは先述したエジプト管理下のコロニーと考えられている地域を含んでいる。そこでこれは赤色磨研土器に見られる製法の差が、その地域内の様々な場所で土器が製作された事実を表しているものと言えよう。すなわち、赤色磨研土器はその土地土地で収穫された農産物などを輸送した、土着の運搬容器であったと推定される。かつてアミランは、タルカン出土の赤色磨研土器にエジプトの王を示すホルスが記されている例を挙げ、エジプトへ輸送された土器に王家の土器集積場で刻印を付けてから、王が各地へ配布した可能性を指摘した [Amiran 1968]。だがもし筆者の解釈が正しければ、むしろ王名はパレスティナのエジプト管理地域においてあらかじめ記されており、それからエジプト本土へ輸送された可能性もあると言えよう。

一方彩文土器に関しては、主に彩文の文様からパレスティナ南方にその起源がある可能性を同じくアミランが主張している [Amiran 1974b]。中でも、エジプト出土の彩文土器に類似したものが多数出土するのは死海南西に位置するアラドで、ここはパレスティナにおける銅製品の供給地として繁栄した町である [Amiran, Beit-Arieh, and Glass 1973]。ただし、彩文に関してはアミランがカナーンでは発見されていない文様がエジプトに多数存在することを指摘しており [Amiran 1974b]、筆者も今回の調査でそれを確認している。だが、アラドの日常土器はシナイ半島の土を使用していたことが判明しており、シナイの銅山とアラドの間には、エジプトの初期王朝時代から古王国にかけて密接な関係があると同時に [Amiran 1978]、エジプトが第1王朝の時点で既にシナイの銅を入手していたことも墓の副葬品や文字資料等から明らかである [Edwards 1971]。先王朝時代末期のナルメル王の名を記したオストラカなどが出土している点も [Amiran 1974a]、アラドがエジプトと深く関わっていた可能性を裏付けるものと言えよう。そこで彩文土器が製作された地(域)は、エジプトにとって特別の意味を持った場所であったと考えることができる。

IV. 結 論

以上、調査の結果得られたアビドス土器の新たなデータを基に、土地別時期別の出土点数・出土状況・製法・製作地といった観点から、赤色磨研土器・彩文土器が有したであろう性格について考察した。そこで最後に今回の分析から、両土器の分布が第1王朝の王墓所在地について何を示唆しているのかを示しておきたい。

まず赤色磨研土器に関しては、

- (1)アビドス・サッカラにおいて玄室だけでなく、副葬品室や付属墓にも副葬される
- (2)同時代最大の墓から、その時期最大の点数が出土するとは限らない
- (3)先王朝末期から既に輸入されており、器種も多い

といった状況から見て、この土器は先述したようなワイン等の運搬容器として重要であったと思われる、土器そのものが価値を持つというよりは、その中身が大事であったと考えることができよう。それ故、それはある特定の人に対して輸入されたのではなく、その輸入に何らかの形で関わった人の手にも渡ったと捉えることが可能である。いわゆる「大墓」のみでなく、サッカラにおける下級貴族墓からも出土が見られるのは、そのような土器の性格を反映したものと考えられる。ただしそうは言っても依然輸入量は限られており、その下級貴族が土器を入手できたのも、サッカラという場所に葬られたことから判断するに、首都域においてエリート層と関連を有していたからであろう。

一方、彩文土器はその性格を大きく異にしている。この土器は、

- (1)アビドスに集中する
- (2)玄室に納められる
- (3)サイズが小型で器種もほぼ一定しており、単にワイン等を運搬するための容器だったとは考えにくい

といった特徴を有する。そこで私はこれを死者のそばに副葬することを目的とした、特殊な土器であったと捉えたい。またその中にはワインのみならず、前述したように油が納められていた可能性が高いとされるが [Stager 1985: 179-180], それは、被葬者が来世で使う香油として副葬されたものではなかったのだろうか。これは、赤色磨研土器がエジプト製土器と同様ワイン壺としても副葬されたのとは異なり、彩文土器が、たとえワインが入っていたにしろ死

者に直接備えたものであったことを意味する。この点は、彩文土器が赤色磨研土器や同時期のエジプト土器に比較して非常に美麗であることから推測できよう。

更には、この彩文土器がアラドを中心とした、当時エジプトが最も重要視していた銅製品の供給地、あるいは実際に王名を記した遺物が多数発見されている地からエジプトのエリート墓に輸入されていることで、王と関連を有していた人々の墓に副葬されたものと捉えることも十分可能である。加えて、同様の文様がパレスティナ地域で発見されていない点は、むしろこの土器がエジプト向けに特別に製作されたものであった可能性をも示しているように思われる。すると、それを持つことが許されたのは王と関連を持っていた人々と言うよりは、当時エジプトを支配していた王その人だったのではなかろうか。既に述べたように、従来の王墓地論争で、王に関連する遺構であることが確実とされるアビドスにおいて、これほど価値の高い彩文土器が集中して出土する状況は、やはりアビドスこそがエジプトの王を埋葬した墓域であったことを示しているのではないだろうか。

以上、従来の王墓地論は遺構規模の比較によってしか論じられなかったとの反省に立って、新たに遺物、すなわちパレスティナ製土器の観点から第1王朝の王墓所在地を再考してみた。その結果、輸入土器2種類の中でも、彩文土器が当時のエジプト王に送られた、価値の高い土器であった可能性が強いとの結論に達し、その土器をほぼ独占的に有しているアビドスを、第1王朝の王墓地と比定するものである。

これは、あくまで輸入土器の観点から見た第1王朝の王墓地比定に関する一つの仮説である。図らずも、筆者が従来支持してきたアビドス王墓・サッカラ高官墓説を補強する論となったが、今後は更に新たな視点、例えば副葬品同士の同伴関係や扶壁建築の発展等から、この問題を再度検討していく所存である。

〔付記〕本稿は、第37回日本オリエント学会大会における発表原稿に、訂正加筆したものである。

注

(1) 文字資料としては著名なカプロニー (Kaplony, P.) の集成があるが [Kaplony

1963-64], 殆どは人物の称号や短い言い回しの類であり、文章として残っているものは皆無に近い。

- (2) Hoffman (1980: 287) は、逆に、アビドスの墓が真の墓でサッカラが空墓の可能性もあるとしているが、明確な理由を述べるには至っていない。しかも、サッカラの墓からは木棺の残存や被葬者の遺体と思われる人骨の出土例もあるため [Emery 1938: 8, 1949: 18, 98, 119, 1954: 20, 1958: 12, 45, 79], その可能性については疑問が残る。
- (3) ティスはアビドス近郊に存在し、上エジプト第8州の首都であったとされる。詳しくは、[Kess 1961: 231-251] を参照。
- (4) ただし、Vercoutter はその著書の中で必ずしも自身の立場を明確にしていないように思われる。
- (5) この周壁状の建築物に関しては、白井則行氏が調査および研究の歴史と、問題点について述べている [白井1994]。
- (6) アビドスでは、王名を記した大型の石碑がジェル・メルネイト・ジェット・セメルケト・カア・ペルイブセンの計6王について発見されているのに対し（この内ペルイブセンは第2王朝の王）、サッカラ出土の大型石碑は、高官メルカの碑のみである。その碑には、セム神官などといった彼の称号が記されている。詳しくは、[Emery 1958: 30-31, Pl. 23, 39, Helck 1987: 230-236] を参照。
- (7) 最初に発見された地にちなんでこの名が付けられている。ただし、研究者によっては後述する赤色磨研土器と彩文土器のどちらかに限定してこの名を使用している場合もあり、その意味するところは人によって必ずしも一致しない。ここでは、今問題としているアビドス・サッカラの一方の名前を利用しているため混乱をきたす恐れがあるものの、慣例に従うという意味で、両種類の土器に対してこの語を便宜的に使用する。
- (8) 「パレスティナ」という語を、ここではイスラエル・ヨルダン、およびシナイ半島を中心とした地域に用いることとする。この定義については、藤井氏のもの [藤井1985] を使用させて頂いた。
- (9) アビドスでは、王墓と考えられている12基すべての墓が火災の被害を受けている。一方、サッカラにおいても多くの墓が火災に遭っている。エメリーは、サッカラ3505号墓の状況を次のように示している。“A very large percentage of the great tombs of the First Dynasty at Sakkara, Abydos, and Nagadeh have been burnt,... Such a fire must have smouldered for weeks, and we may not be in error in considering that it was done deliberately with official sanction. [Emery 1958: 11]” 彼の言うように、墓に火を放つという行為が公的なものであったとするならば、それ自身も王墓地を考察する上での手掛かりになるのかもしれない。
- (10) ただしアビドスとサッカラでは、遺構や遺物の残存程度にかなりの差がある。アビドスの墓群は、元々の盗掘に加えてピートルの前に調査を行ったアメリカ人が非常

に雑な発掘を行い、遺物も破壊するなどの悪質な行為をしている。それに対してサッカーでは、古代における盗掘は無論あるものの、エメリーが当時としては非常に手の込んだ調査を行い、記録も正確に取っている。

- (11) ただし、サッカーでは下級貴族層の墓地と考えられるところからも13点の輸入土器が出土しているとの報告がある [Macramallah 1940]。だが、その内の彩文土器については本当にパレスティナ産なのかどうか、その形状や文様のパターンから見て疑問が残る。詳しくは [中野 in press] を参照。
- (12) 1995年の夏に英国ケンブリッジで行われた国際エジプト学会において、ドライヤー (Dreyer, G.) は、先王朝末期の王とされるイリ・ホール (Iry-Hor) の墓からも、多量のパレスティナ土器が発見されたことを報告している。
- (13) ヘネシーの分析は「放射分光法 (Spectrographic Analysis)」と呼ばれ、微量で限られた要素しか測定できないものであった。それに対してポラトは「中性子放射化分光法 (Neutron Activation Analysis)」と呼ばれる最新の測定法を使用している。この方法によると、ごく限られた試料でより幅広い要素の同定が可能である。
- (14) ロンドン大学ビートリエジプト考古学博物館のバーバラ・アダムス (Barbara Adams) 女史と、オックスフォード大学アシュモレアン博物館のヘレン・ホワイトハウス (Helen Whitehouse) 博士には、この調査研究に際して格別の便宜を図っていただいた。また、この研究は筆者が1991年から1993年の2年間、オックスフォード大学大学院オリエント学部エジプト学科に留学中、同学科教授のジョン・ベインズ (John Baines) 博士にご指導を頂いて行ったものである。ここに記して感謝申し上げる。
- (15) 土器は、大部分が破片であるために点数の換算には注意を要した。この点について、筆者は全破片を実見し記録している。なお、破片同士で接合が可能なものは1点とした。詳しくは、[中野 in press] を参照。
- (16) 同墓群の位置する Umm el-Qaab は、「壺の母」という名が示すとおり大量の土器片が辺りに散乱していることで知られている。筆者も現地を訪れて状況を確認している。
- (17) 個々の土器片がどの王朝に属するかは、それが出土した墓の比定時期に依った。中には別稿で示す型式分類作業の結果、後に副葬されたのではと思われる土器片も数点存在したが、本論文の大勢に影響はないと判断したため、個々ではあえて報告者が比定した遺構の王期に沿って示した。詳しくは、[中野 in press] を参照。
- (18) 前述した模造品の疑いが残るものの内、2点 [Macramallah 1949: Pl. 50-2, 32-Fig. 28-5] を含めた数値。
- (19) この説に関しては、ビートリが、アネジブ王の葬儀はおそらく他の王に比較して簡素であり、彼の所持品も後継者のセメルケト王に取られてしまったのではないかの考えを調査報告の中で述べているくだりがある [Petrie 1900: 12]。
- (20) エジプト・パレスティナ間の相対年代設定については他にも多くの論があるが、

その多くは、ここで取り上げた輸入土器の資料に基づいている。しかしながら、既に述べたようにこの土器の資料自体がきちんと今まで公開されてこなかったために、中には、その年代観が明らかに誤っていると思われるものが幾つか存在する。ここでそれを一つ一つ取り上げることは本稿の目的と外れるため行わないが、詳しくは [中野 in press] を参照されたい。

- (21) 殉葬かどうかの議論については, [Hoffman 1980: 275-279] を参照。
- (22) アビドスとサッカラの墓については構造的側面からも分析がなされているが, アビドスの墓においては上部構造が残存していないので, 両者間においては下部構造を比較せざるをえない。詳しくは [Kaiser 1991] を参照せよ。
- (23) 詳しくは [中野 in press] を参照。
- (24) アビドス先王朝期の墓から出土したパレスティナ製の土器に対する解釈も, このような説を採っている [Dreyer 1993: 55]。
- (25) ピートリ博物館蔵。No. 17089. タルカン第1060号墓出土。[Petrie 1914: Pls. XVI-4, XXX6-7]
- (26) Early Arad (1978) による。ただし, 同地からは引き続き彩文土器が出土していると考えられるため, 同様のパターンが全くないと断言することはここでは避けたい。

参考文献

- 雑誌等の略は Helck, W. und Otto, E. (Hrsg.) Lexikon der Ägyptologie. Bd. I., Wiesbaden. 1975. に依った。
- Amélineau, E. 1899-1905. *Les nouvelles fouilles d'abydos (1895-98)*. 3 vols. Paris: Ernest Leroux.
- Amiran, R. 1968. "Two Canaanite Vessels Excavated in Egypt with Egyptian 'Signatures.'" *IEJ* 18: 241-243.
1969. *Ancient Pottery of the Holy Land*. Ramat Gan.
- 1974a. "An Egyptian Jar Fragment with the name of Narmer from Arad" *IEJ* 24: 4-12.
- 1974b. "The Painted Pottery Style of the Early Bronze II Period in Palestine" *Levant* 6: 65-68.
1978. *Early Arad. The Chalcolithic Settlement and early Bronze City. I. First Fifth Seasons of excavations, 1962-1966*. The Israel Exploration Society, Jerusalem.
- Amiran, R., Beit-Arieh, I., and Glass, J. 1973. "The Interrelationship between Arad and Sites in Southern Sinai in the EBaII" *IEJ* 23: 193-197.
- Ayrton, E., C. T. Currelly, and A. E. P. Weigall. 1904. *Abydos. Part 3*. Egypt Exploration Society 25. London.

- Ben-Tor, A. 1986. "The Trade Relations of Palestine in the Early Bronze Age" *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 29:1-27.
1991. "New Light on the Relations Between Egypt and Southern Palestine During the early Bronze Age" *BASOR* 281: 3-10.
- Dreyer, G. 1990. "Umm el-Qaab: Nachuntersuchungen im frühzeitlichen Königsfriedhof 3./ 4. Vorbericht" *MDAIK* 46: 53-90.
1993. "Umm el-Qaab: Nachuntersuchungen im frühzeitlichen Königsfriedhof. 5./ 6. Vorbericht" mit Beiträgen von Ulrich Hartung und Frauke Pumpenmeier. *MDAIK* 49: 23-62.
- Edwards, I. E. S. 1971. "The Early Dynastic Period in Egypt" In *Cambridge Ancient History, 3rd edn., vol. I, pt. 2*, 1-70. Cambridge University Press, Cambridge.
- Emery, W. B. 1938. *Excavations at Saqqara: The Tomb of Hemaka*. Cairo: Government Press.
1939. *Excavations at Saqqara: The Tomb of Aha*. Cairo: Government Press.
1949. *Great Tombs of the First Dynasty, I*. Cairo: Government Press.
1954. *Great Tombs of the First Dynasty, II*. London: Egypt Exploration Society.
1958. *Great Tombs of the First Dynasty, III*. London: Egypt Exploration Society.
1961. *Archaic Egypt*. (Penguin Books) Harmondsworth.
- Gophna, R. 1992. "The Contacts between 'En Besor Oasis, Southern Canaan, and Egypt during the Late Predynastic and the Threshold of the First Dynasty; A Further Assessment" in *the Nile Delta in Transition: 4th.-3rd. Millennium B. C.* ed. by van den Brink, C. M. The Israel Exploration Society, Jerusalem.
- Grimal, N. 1992. *A History of Ancient Egypt*. Oxford.
- Guigues, P. E. 1937. "Lébée'a, Kafer-Garra, Qrayé, nécropoles de la région sidonienne" *Bulletin du Musée de Beyrouth* 1: 35-76.
- Hall, H. 1915. "Notes and News" *JEA* II: 186-7.
- Helck, W. 1962. *Die Beziehungen Ägyptens zu Vorderasien im 3. und 2. Jahrtausend V. Chr.* Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
1979. "Einige Betrachtungen zu den frühesten Beziehungen zwischen Ägypten und Vorderasien" *Ugarit Forschungen* 11: 357-363.
1987. *Untersuchungen zur Thinitenzeit*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Hennessy, B. 1963. "Spectrographic Analysis of the Foreign Pottery from the Royal Tombs of Abydos and Early Bronze Age Pottery of Palestine" *Archae-*

- ometry 6: 10–17.
1967. *The Foreign Relations of Palestine during the Early Bronze Age*. London.
- Hoffman, M. A. 1980. *Egypt before the Pharaohs*. (Ark Paperbacks Version 1984), London.
- Kaiser, W. 1981. “Zu den Königsgräbern der 1. Dynastie in Umm el-Qaab” *MDAIK* 37: 247–254.
1991. “Zur Rekonstruktion der Oberbauten der Königsgräber der 1. Dynastie in Abydos” *MDAIK* 47: 93–104.
- Kaiser, W. & Dreyer, G. 1982. “Umm el-Qaab: Nachuntersuchungen im frühzeitlichen Königsfriedhof 2. Vorbericht” *MDAIK* 38: 211–69.
- Kantor, H. 1942. “The Early Relations of Egypt with Asia” *JNES* 1:174–213
1965. “The relative Chronology of Egypt and Its Foreign Correlations before the Late Bronze Age” In *Chronologies in Old World Archaeology*, 2nd edn., The University of Chicago Press, Chicago.
1992. “Egypt” In Ehrich, R. W. (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology*, 3rd. edn. Chicago and London.
- Kaplony, P. 1963–64. *Die Inschriften der ägyptischen Frühzeit*. 3vols. AÄA 8, Wiesbaden.
- Kees, H. 1961. *Ancient Egypt-A Cultural Topography*. (Edited by James, T.G. H. and translated by Morrow, I. D.) The University of Chicago Press. Chicago and London.
- Kempinski, A. 1989. “Urbanization and Metallurgy in Southern Canaan” In: de Miroshedji, P. ed. *L’urbanisation de la Palestine l’âge du Bronze Ancien*. (BAR International Series 527). Oxford: 163–168.
- Kemp, B. J. 1966. “Abydos and the royal tombs of the First Dynasty” *JEA* 52: 13–22.
1967. “The Egyptian 1st Dynasty Royal Cemetery” *Antiquity* 41: 22–32.
1989. *Ancient Egypt-Anatomy of a civilization*. Routledge.
- Lauer, J. P. 1979. “La développement des complexes funéraires royaux en Egypt depuis temps prédynastiques jusqu’à la fin de l’ancien Empire” *BIFAO* 79: 355–94.
- 1984–85. “Considérations sur l’évolution de la tombe royale sous la 1ère dynastie” *BSEG* 9/10: 141–152.
- Lev-Yadun, S. and Gophna, R. 1992. “Exportation of Plant Products from Canaan to Egypt in the Early Bronze Age I: A rejoinder to William A. Ward (Short Notes)” *BASOR* 287: 89–90.
- Levy, T., van den Brink, E., Goren, Y. and Alon, D. 1995. “New Light on

- King Narmer and the Protodynastic Egyptian Presence in Canaan" *Biblical Archaeologist* 58: 26-35.
- Macramallah, R. 1940. *Un Cimetière Archaique de la Classe Moyenne du Peuple à Saqqara*. Cairo.
- Mazar, A. 1990. *Archaeology of the Land of the Bible*. Doubleday, London.
- Petrie, W. M. F. 1900. *The Royal Tombs of the First Dynasty. Part I*. (The Egypt Exploration Fund 18th Memoir) London: Kegan Paul, Trench, Trübner and Co.
1901. *The Royal Tombs of the Earliest Dynasties. Part II*. (The Egypt Exploration Fund 21 st Memoir) London: Kegan Paul, Trench, Trübner and Co.
1902. *Abydos I*. London.
1903. *Abydos II*. London.
1914. *Tarkhan II*. London.
1925. *Tombs of the Courtiers and Oxyrhynchus*. London.
- Porat, N. 1989. *Composition of Pottery-Applications to the Study of the Interrelations Between Canaan and Egypt During the 3rd Millennium BC* (Ph. D. thesis). Hebrew University of Jerusalem, Jerusalem.
1992. "An Egyptian Colony in Southern Palestine during the Late Predynastic-Early Dynastic Period" in '*the Nile Delta in Transition: 4th.-3rd. Millennium B. C.*' ed. by Van den Brink, C. M. The Israel Exploration Society, Jerusalem.
- Spencer, A. 1993. *Early Egypt-The Rise of Civilisation in the Nile Valley*. British Museum Press, London.
- Stager, L. E. 1985. *The Firstfruits of Civilization*. In *Palestine in the Bronze and Iron Ages: Papers in Honour of Olga Tufnell*, edited by Jonathan Tubb, pp. 172-87. London: Institute of Archaeology.
1992. "The Periodization of Palestine from Neolithic through Early Bronze Times" In: Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology* (3rd ed.). Chicago.
- Trigger, B. G. 1983. "The rise of Egyptian civilizaion" in *Ancient Egypt-A Social History*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Vercoutter, J. 1992. *L'Egypte et la vallée du Nil. Tome I. Des origines à la fin de l'Ancien Empire*. Presses Universitaires de France, Paris.
- Ward, W. 1991. "Early contacts Between Egypt, Canaan, and Sinai: Remarks on the Paper by amnon Ben-Tor" *BASOR* 281: 11-26.
- Yadin, Y. 1955. "The earliest records of Egypt's penetration into Asia?" *IEJ*

5: 1-16.

Yeivin, S. 1960. "Early Contacts Between Canaan and Egypt" *IEJ* 10: 1-203.

小野山節 1975. 「エジプト初期王朝期の王墓」古代オリエント研究会.

白井則行 1994. 「エジプト初期王朝時代の "Talbezirk" について」『遡航』第12号：
69-87.

中野智章 in press. 「エジプト第1王朝におけるパレスティナ土器の型式編年研究」『南山大学大学院考古学研究報告』第6号.

藤井純夫 1985. 「パレスチナの土器」『世界陶磁全集第20巻-古代オリエント』：209-
220. 小学館。